

Title	初年次ゼミナール 5年めの考察
Author(s)	堀江, 珠喜
Editor(s)	
Citation	言語と文化. 16, p.43-62
Issue Date	2017-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10466/15189
Rights	

初年次ゼミナール 5年めの考察

堀 江 珠 喜

初年次ゼミナールの第一期生たちが昨年度末に大学を卒業した。そこで今年度のT Aは、1年次にいずれかのゼミを経験した院生2名を例年通り工学研究科の綿野教授から推薦していただくことになった。テーマも例年通り「将来エリートを目指す者には何が必要か？——を考える」だが、進め方は、これもまた例年通り、受講生の資質に合わせて柔軟に対応するのが私流である。

第一回めは、学生12名（うち工学域6名、現代システム4名、地域保健2名、また男子10名、女子2名）に机をまるく並べて座らせ、B4用紙に太いマジックペンで各々の姓を書かせて机の前に貼らせ、今後のゼミはこの状態で行う旨を伝えた後、この全員とT A2名に自己紹介をさせた。

翌週の宿題として「エリートにとって必要な10項目を考え、そのうち特に重要な3項目を選び、その理由が説明できるように準備すること」を言い渡す。このゼミでは口頭発表や議論の機会が多いが、そのときにはできるだけ「大人の日本語」つまり将来、入社試験の面接で話しても恥ずかしくない言葉を用いるように求めた。たとえば男子学生は「僕」や「俺」ではなく「私」（わたし、又は、わたくし）を一人称として使い、「うちのおかあさん」ではなく「私の母」と自然体で言えるような訓練の場として欲しいのである。テーマより時間帯重視でこのゼミを選んだ学生たちも、私の勢いに圧倒されたのか、熱心に聞いてノートを取っていた。

この日の後半は例年のように図書館ツアーであるが、私が階段等での歩行が困難な身障者なので、2名のT Aに引率を頼んだ。

《自分の問題として考える！》

第2回めは、それぞれがエリートにとって必要な10項目を発表し、そのうち特に重要な3項目について説明させることにした。司会の希望を募ったところ、工学域の男子学生が挙手したので任せしたが、あまり経験がないようで、私が助言することになった。だが、だからこそ、この学生には良い経験となったと信じた。

さて、司会者としての能力が試されるのは、全員が3項目を出した後、議論を重ねて10項目に絞り込むことである。「10」という数は、私がこれまで著書を25冊執筆した経験から、これだけの章立てがあれば一冊の本になるためである。もちろん新書の場合は8章くらいにまとめる必要もあるが、10から8に減らすのも、逆に12に増やす

のも、容易な作業なのである。いっぽう「3」は、これをテーマにスピーチや講演を求められた時に都合のいい項目数なのだ。与えられた時間によっては「3」を「5」や「7」くらいに広げることも困難ではない。

もちろん12名が考えた最重要3項目が、重複する場合もある。数名が同じような意味のことを言うと、まるで多数決が最良の方法のように、すんなりと10項目に入れてしまうことに危うさを感じた。世の中には多数決で答えを出してはいけない問題があることに、そろそろ気付いてもいい年頃だろう。また正解だけを求めるのではなく、そこに至るプロセスの重要性も認識するべきだ。

しかしながら結局、この日はより多くの者が同意した「行動力」、「判断力」、「柔軟性」、「努力」が選ばれた。ふつうの言語感性を持っていれば、この「努力」が他の3項目とは異次元の言葉であることに気付くはずだが、誰もこの件に反対しない。私ももう少し黙って様子を伺うことにした。

第3回め、やはり司会者を募ったところ、挙手がない。前週に「行動力」の重要性を最初に認識したわりには、まったく実動が伴っていない。そこで前週の司会者に指名させることにした。自分自身を指名してもいいと付け加えると、ではそうすると言う。意欲的なのか、他者を見分ける力に自信がないのか、指名して恨まれることを恐れているのか、よくわからないが、他に希望者がいないので、再び任すことにした。

最初は前週から候補に上がっていた「容姿」についてである。「見ため」、「身だしなみ」、「見かけ」などのどの言葉が適切かは決められなかったが、要するに「ルックス」が大事ということだ。(翌週、私はこれを視覚的影響力とする。)これについて、私は全員を立たせ、自信があるように堂々とした体勢をとらせた後、その逆に弱々しく自信喪失の姿勢をとらせ、その違いを認識させた。中身は同じなのに、外見でこれほど相手に与える印象が異なる。であれば、どのように意識して人前に立てばよいのかがわかるというものだ。(これについて私は以前、英国の王立演劇学校出身の俳優たちによるワークショップに参加して学んでいた。)ただし、これについてはほとんどの学生が、その意図を理解しなかったか、すぐに忘れてしまったらしく、後日、「見かけ」について「センスの良い服装」としか考えない発表者たちの存在に失望することになる。

この後、ようやく「コミュニケーション能力」の重要性についての指摘があり、「話が面白い、上手」な者が好かれるとの意見が出た。それについて「男性は女性に対し外見の良さを第一に求める」との反論もあり、しばらく熱心な議論が交わされた。

そう、自分の問題として考えれば一所懸命になるのだが、どうもまだ彼らは「エリート」を他人事としてみなしている。たとえば「エリート」という言葉から、スポーツ選手を連想する傾向があるようなので、今更、彼らがスポーツ選手を目指すことは不可能に近く、可能性が残されているのは研究者、ビジネスエリート、官僚、政治家であることを自覚させる必要があった。

そこで出てきたのが「(失敗から学ぶ) 対応力」、「自信を持つ」であり、「知識力」

からなんとか「情報収集能力」という言葉を引き出すことができた。これで9項目にはなったが、前述のように「努力」を入れるわけにはゆかない。その理由として「他の項目については、たとえば『行動力を身につけるにはどうしたらいいか?』と問えるが、『努力するにはどうしたらいいか?』では愚問になってしまう。このように、同様の文章の中に挿入できるか否かで、同類の言葉か異種かがわかるし、ときには言葉の意味が明確になる」と教えた。そのほか「自信を持つ」にも賛成しかねるので、あと3項目ずつ自分の問題として考えてこさせることにした。

《それでも考えられない?》

第4回めの司会者には、初回から元気が良く積極的に発言していた工学域の女子が挙手したので任せた。彼女はときおり、貧しい環境で育った旨を語るのだが、それでいてピアノを習った話もあって、現実はどうなのか、よくわからない。だが、そのパワーは「赤貧チルドレン」と呼ばれるあの人気漫画『じゃりん子チエ』の主人公を連想させてくれる。

「チエちゃん」は、前回の終わりに私が指摘した「努力は他項目と異なる」件について、よく理解し、まずこの項目を外すことから始めてくれたが、男子学生のなかにはまったく私の説明を覚えていない者もいた。

私としてはいい加減、この回で、10項目を揃えたかったので、彼らが頭に浮かべるイメージをより包括的に表す言葉にすり替えるいっぽう、彼らからも言葉を引き出した。たとえば「健康が大事」という発言から「健康管理能力」、そして「自己管理能力」となんとか彼ら自身で言葉を導き出させた。だが「カリスマ性」、「リーダーシップ」、「統率力」などの発言以上には進みそうになく、「組織運営力」と私が提案した。「マネジメント能力」でもいいのだが、できればカタカナ語は避けたい。コミュニケーション能力だけは、どうしても日本語にできないのが歯痒いのだが、「伝達能力」とも違う気がするのだ。

ここで、ふと気がついたのは、なんと受講生のうち3名が現代システム科学域のマネジメント学類なのに、誰一人、これまで自分の所属名を思いつきもしなかったのは、なんとも皮肉である。いったいこの学類の「マネジメント」とは何を意味するのだろうか。前知事の意向にすり寄って慌てて理系らしい名称をでっち上げたものの、中味がともなっていないのかと意地悪く考えてしまう。

また「運」が大事との意見も少なからずあった。「誕生と成長の環境は自分で選べないし変えられない」というのだ。「チエちゃん」も、これには同意しながらも、だからこそ努力しなければならないことがある旨、またもや自分の育った環境の貧しさを強調しながら熱弁を振るっていた。私も「運も実力のうちだが、その運が回ってきたときにそれを掴めるだけの能力が自分に備わっているか否かは努力次第」と応援した。

さて、あと2項目欲しいのだが、もうあと15分しか授業時間が残っていない。前回

のゼミと今回とのあいだにゴールデンウィークが挟まったため、彼らには2週間も考える時間があったにもかかわらず、どうも「考える」作業が苦手なようである。(前回の終わりに、「なにか関連書を見つけ、その中からキーワードを取ってあげてほしい」と助言したのだが、誰も実行しなかったようだ。彼らが一番に挙げた「行動力」が伴っていないにもほどがある。図書館、本屋、ネット検索で用語を探そうとも「考え」られないのだろうか。)

そこで彼らからの発案を諦めた私は、溜息をつきながらこのように誘導した——「情報収集した後、判断して行動する前に何をします？」これで、やっと「考える！」という言葉を出させた。このゼミの初回から「考えてくるように」と言い続けているのに、「考えること」の重要性に誰も気が付いてくれなかったのだ。「人間は考える葦である」——パスカル先生もあの世で嘆いておられることだろう。現代男子が「草食系」と言われて久しいが、これじゃ「草食系」どころか、「考えることのない」ただの「草」だ！日本が、教育において他の先進国に劣っている現実を直視せねばなるまい。

「考える」を「考察力」に改めた後、「経済力は必要だと思いますか？」と問いかけた。「カネ」の話には拒否反応を示す男子学生も数人いて、「別に必要ないと思います」と即答した。「シンガポールで資金調達すればいい」などと安易で脳天気な理由を述べた男子学生に対し、思わず私は「シンガポールに行く交通費は？」と突っ込んだ。当然ながら、これには答えられないでいる当の学生に対し、「チエちゃん」は「赤貧チルドレン」らしく、「オカネは大事！私なんて大学受験するのに塾や予備校に行くオカネもなくて、もし府大に入れなかったら浪人する経済的余裕が無いから就職しなくちゃならなかったのよ」と反論。それに対し、「でもアルバイトすれば...」との男子学生の弱々しい呟きに、なおも我が「チエちゃん」は、「あんたら、アルバイトに行くための交通費がないという状況、理解できる？」

彼女の迫力のゆえか、担当教員が提案したから承諾したのか、はやくランチタイムを迎えたかったのか、反対意見を考えるのが面倒だったのか、ともかく「経済力」は10項目に入った。そこで私は付け加えた——「これは自分の経済力とは限りません。自分になれば他者の経済力を使う方法を考える。親戚に払ってもらおうというのではなく、たとえば本を購入する資金がないなら、図書館から借りる。蔵書は財政の豊かな自治体のほうが揃っている。東京は住居費は高いけれど、公共の施設が揃っている。問題は、どうやって他者の経済力を利用するかを考えられるかどうか」。

今回は、これらの能力を身につけるためにはどうすればよいか、それはなぜか、について「考えて」こさせることにした。ただし全員が全項目ではなく、司会者以外は、一人2項目で、その割当は次回の司会希望者で生徒会長経験のある工学域の男子に決めさせた。

《『いろいろ』って何?》

第5回めは、「いろいろ」な能力を習得するためには「いろいろ」な経験と「いろいろ」な知識を身につける、といった、とてもじゃないが及第点を出せないような内容を平気で発表する者が多く、「いろいろ」って何?と私は突っ込みたかったが、誰かが気付いてくれないのかと辛抱強く聞く。すると、さすがはチエちゃん、「経験の中味が大事では」と疑問を投げかけてくれた。司会者も生徒会長経験者らしく、全員の発表が終わると、そのなかで重要とおぼしき「経験について」と「自己管理能力」に絞って議論を進めた。途中で脱線することも多かったが、昨年にと比べると、全員が一応はノートをとっているだけ学習態度は悪くない。だが、どうすれば「いろいろ」のお子ちゃまレベルからグローバルスタンダードにまで上げることができるのだろうか。

こう悩みながらも、「しかし待てよ、だいたい日本の政治家にしても、この『いろいろ』レベルではないか? 国政を預かるものからして、マスコミに対し、平気でこの種の発言を繰り返す現状こそ、教育レベルの低下を招いているのではあるまいか? 決して、ゼミ生の能力が劣っているわけではなく、残念ながら、これが現代日本の知的実態を表している」という悲しい現実を思い出す。

さらに、昨年度までの学生に比べ、ポストゆとりで受験勉強ばかりやらされた弊害か、雑学を切り捨てて育ったのか、「想像力」欠如のきらいがあるように感じた。つまり「エリート」という言葉から、昨年度までは、抽象的ながらもまともなエリート人物像が思い描けたのだが、今年はテレビに出る有名スポーツ選手をまず連想する学生がいるくらいで、「いろいろ」が逆説的に表すように、実は何も思いつかないのだ。

そこで、ちょうど『週刊文春』で3週にわたり(当時)スキャンダルを報じている東京都知事・舛添要一について、「何が問題なのか、その問題の本質について考える」という宿題を出すことにした。具体的なエリートとして、好例な反面教師と考えたのである。「いろいろ」な意見がでることを期待している。

その第6回め。一応は全員が舛添要一の経歴をネットで調べたようだが、どの程度の詳細が必要なのか、また、得た情報からどのように考察すればいいのかがわからないようであった。そのため、「政治資金の私的流用に説明責任を果たしていないことから、都知事としての資格を疑う」旨、昨今のテレビに登場する芸能人コメンテーターのレベルの発表が異口同音になされた。これは学生が育った社会の、とりわけお粗末なバラエティ的世相報道番組、そして「議論を尽くす」と言いながら全くそれを実行しないで平気な言葉足らずの日本の政治家の実態を反映していると考えざるを得ない。つまり、学生の思考力低下は、日本社会自体にその原因があるのだ。

ただしそんな中で、チエちゃんが、4月からこのゼミでまとめてきたエリートに必要な10項目と照らし合わせながら考察していたのは、救いであった。また、これまであまり目立たなかった現代システムの男子学生が、舛添の東大辞職が1989年であること、「目先の利益しか考えていない」と指摘したことは、この日の私の「考え方」を

教える良いきっかけとなった。全員の発表後は、もう司会者の力量不足なので、私が質問しながら答えを誘導し、学生が生まれる前の時代状況を解説する。

舛添は東大法学部出身だが専門は法律ではなく政治。それなら法律家にはならずとも、旧財閥系を筆頭に大企業への就職、あるいは高級官僚への道、そして大学に残るというおおまかに3つの選択肢があったはずだ。「では、なぜ、大学教員を選んだのか？」——これが、私の最初の質問だ。

これに対し、まず学生が考えついたのは「テレビに出て有名になりたかった！」

そう、今やテレビをつければ必ずと言っていいほど、大学教員が登場する。ゼミ生たちは、そんな時代に育っているのだ。だが、昔はそうではなかった。確かに舛添はテレビで有名にはなった。だが、私が大学院に進んだ頃には、よほど硬派の教養番組に出演する有名大学教授はいたが、あとは「イレブンPM」に我が母校・神戸女学院の社会学教授・小関三平がときおり出るくらいだった。

国際政治学者では、京都大学の高坂正堯が「売れっ子」ではあり、神戸女学院の学園祭に講師として呼ばれて来ていた。しかし、かつての大学教員には彼らなりの矜持があり、現代のような軽佻浮薄なバラエティ的報道番組への参加は引き受けなかっただろうし、需要もなかった。

ともかく舛添がテレビの人気者になったのは、あくまで予想外の結果だったのだ。で、つぎの学生の答えは「政治家を目指し、総理大臣になりたかった！」

それならばタレント議員や学者議員より、せっかく東大法学部に進んだのであれば、まず大蔵省などの官僚になり、やがて政界、当然ながら自民党代議士を何期か務めて入閣、そして……と「王道」を目指すのではあるまいか？福田赳夫、宮澤喜一、そんな名前を挙げるが、今の学生は（AKB48のメンバーを知っている）過去の総理大臣については不知。その点、田中角栄先生の名前は、轟いている。嗚呼、可哀想な東大優等総理たちよ！

「偉そうにしたいから」という学生もいた。我々の知る舛添の態度からは、この答えが正解に近いように思われる。日本では「先生」と呼ばれる者は「上座」に着く。いくら大学組織では下っ端でも、学生には「先生」として君臨できるのだ。また外部者からも「東大の先生」として崇められるだろう。

《被差別者の選択》

その次の「安定した収入を求めた」との答えには、さすがに高度成長もバブルも知らない現代日本の若者らしいと、私自身、苦笑を禁じ得なかった。

この学生たちが生まれ育った頃は、公務員の安定したポジションと収入がもてはやされ、ときには税金泥棒扱いされているが、それまでの日本、少なくとも私が府大に勤めるまでは、公務員の給与は「低く安定」だった。世間がバブルで騒ぎ、あちこちでドンペリが泡を吹いていても、まったく無関係の地味な生活を我々は送っていた。

たとえば公務員の給与の低さについては東野圭吾も、短編小説「シャレードがいっ

ばい」(1990)のなかでヒロインの結婚相手について次のように書いている——「実家の母は公務員が希望らしいが、この御時世にありえない。市役所で二十年以上も勤めたおじさんより、この春に就職した弟のボーナスのほうがはるかにうえなのだ。」

これはバブル最盛期の執筆なので話が極端だが、高度成長期においても、(これほどではなくても)やはり公務員の給与は民間に比べ「低く安定」だった。いっぽう、民間企業にしても今のように不安定ではなく終身雇用が当然であり、むしろ収入は「高く安定」といえたのである。そのバブルがはじけ、低成長と不景気によって、低く安定していた我々の給与が、高く思われて妬まれ、そしられるようになったのだ。そんな話は、学生にとって初めてのようで、皆、熱心に耳を傾けていた。

だが、そんな日本の好景気時代にも、差別される人間の生き方は違っていた。私、そう、たとえば女性である。今でこそ、雇用機会均等法があるが、私の時代には女性は企業でお茶汲み、コピー取り、寿退社と決まっていた。どれだけ優秀であっても、幹部への道は開けていなかった。そこで、なんとか男性とほぼ同じ条件で仕事ができ、しかも(一般論として)高い社会的地位が与えられるのは、医者、弁護士、大学(助)教授だった。

そこでも差別はあったが、女性ながら社会的地位が保証されるのは、「信用」を得ることであり、被差別者にとっては自身の「危機管理上」ありがたいことだったのだ。

では舛添は、どうだったか。優秀な東大生であっても貧しい「母子家庭」であったことが、就職差別につながった可能性は否定できまい。かつての大手銀行は、「身元」を重要視した。ひょっとしたら同様の理由で外交官への道も閉ざされたか。もしそうであるなら、多くの被差別者が選んだように彼もまた「学者」になったのかもしれない。

ただし、医者、弁護士、学者のいずれになるにせよ、教育費が必要だ。その経済力のないアメリカの黒人たちは、まずスポーツでの活躍を始めた。残念ながら水泳やフィギュアスケートにはカネがかかるので、とりあえずは陸上だった。だが、表現力だけの芸術点だのあやふやな要素のある競技に比べ、走る速さだけで勝負できる競技は、きわめて公正だ。そこには人種差別は介在しない。

そして次に黒人たちが活躍を始めたのは音楽だ。俳優もいるが、2016年のアカデミー賞選考で問題になったように、相変わらずアメリカの映画界も白人有利である。そうしてようやく黒人が大統領になったが、この拙論執筆時点では、女性は民主党選出の候補には選ばれたものの、まだ米大統領になっていない。これはアメリカにおいて黒人差別より女性差別のほうが解決されていない事象ともいえるのだ。

では、次の私の質問——「なぜ、舛添は東大教養学部助教授を辞めたのか？」

「教授になれなかったから」と学生は答える。そうだったかもしれない。だが、彼が辞めたのは89年。まだ41歳だ。

「政治家になりたかった？」と答える学生もいるが、すぐに選挙には出ていない。そこで考えるポイントは、89年という時期だ。まさにバブルの真っ最中である。私が

86年に3200万円で購入した芦屋のマンションが3年後に2億円にまで跳ね上がった恐ろしい時代だ。多くの者が金銭的に麻痺して借金と投資を繰り返し、その翌年以降に破産することになるのだ。

「東大の体質を批判して89年6月に辞めたそうです」と、スマホ片手に情報提供してくれる学生に、「具体的に何を批判したの？」と問うが、詳しくはネットでは出てこないらしい。whyの前にwhatも知らないじゃ、どうしようもない。

だが私も当時、彼の「東大批判」を聞いた記憶はない。覚えているのは「僕のようなマスコミの売れっ子が、どうして東大入試の監督をしなきゃならないんだ」と怒ったという話である。学者にそのような雑務をさせる日本の大学は異常だと思うが、彼がマスコミの売れっ子か否かの問題ではあるまい。大学教員の仕事が研究と教育であるかぎり、そのための時間を入試監督で奪うシステム自体がおかしいのだ。

するとある学生が「99年に東大批判の本を出版しています」。はあ？ 辞めてから10年も経ってからの出版なんて遅すぎる！辞めると同時に出版することでインパクトを与えて本をベストセラーにする方法だってあっただろうに、準備不足も甚だしい。

さらに、東大の体質に不満があるなら、辞めずに教授になり学部長になり、できれば総長になり改革することを目指せばいい。たとえ辞めるにしても、それは教授になってからだ。助教授のまま辞めたのでは、「あいつは教授になれなかったから辞めた」と一生、いや死んでも言い続けられるに決まっている。その屈辱を考えると、我慢してもうしばらく助教授でいるほうがいい、とふつうは考える。

それよりも私が気になったのは「6月」という辞職の月である。私の指摘まで学生たちは何も感じていなかったようだが、民間企業とは異なり、大学の場合は、ふつう、3月末までは続ける。でなくても前期や後期の成績は責任を持って出すものだ。

こう考えると舛添の6月辞職はあまりにも無責任ではないか。この1件で、政治資金云々を言うまでもなく、彼の人間性を疑うべきだろう。たとえネットしか情報源がなくても、考察力によって、このように話が展開でき、人格についての判断ができるのだ。(念のため、89年における6月終了の科目の有無を、東大の広報に問い合わせたが、4カ月たっても回答は得られていない。)

それにしても、なぜ89年なのか。やはりバブルと関連させて考えたい。テレビ出演などで大学外の華やかな世界を知った舛添は、東大（といえども給与は他の国立大学と変わらない組織）との金銭的ギャップに馬鹿馬鹿しくなり、それこそ学生の指摘した「目先の利益」に飛びついたのかもしれない。

テレビでは同じ発言をしても「大学教員」と「タレント」ではギャラが10倍くらい違う。我々大学教員は、常に「清貧」を強いられているのだ。そこでタレントに転向することで、増収を図ったのかもしれない。89年とはそのような時期である。とすれば、舛添とカネの問題は、すでにこの89年辞職という事実から伺えるのだ。

《世界に目を向けて！》

第7回めは、課題として客家、ユダヤ、WASPについて全員に調べてこさせた上、3グループに分けて1項目ずつ代表者に説明させた。前回は具体的な個人について、「エリート」の資質を考えたが、今回は、エリートを目指す民族を取り上げて考察したいのである。そこでは差別する側、される側の立場、そして両者の危機管理が理解できるものと期待する。

これらについて調べさせ発表させるのは3年めだが、今年の学生が最も出来が悪い！「ゆとり世代」のほうが、小学生のころから「自由研究」を課されていたけまじだった。どうやら「ポストゆとり」教育は、子どもたちから「考える」という勉強方法を奪い、受験に関係する事柄だけを詰め込んでくれたようである。まるで企業が求める「即戦力」とは、そういうものだと決めつけるように。

特にWASPについての発表がお粗末だったので「たったそれだけ？」と尋ねると、「それしか載っていないよなあ？」と仲間内の同意を求める担当者たち。「じゃあ、英語で検索しました？」と責めるように訊くと、はっとした表情。

実は2週間前の授業で、チエちゃんから「ネットに載っていないときには、どうやって調べたらいいか？やはり本が大事とは思うけれど」と質問され、私は「本の場合には後ろの参考文献が役立つことも多いし、ネットは日本語だけではなく、英語で調べると、より正確で多量の知識が得られることもある」と答えたのだ。

さて「客家」についてはチエちゃんが発表したもので、まだまし。私が心のなかで求めていた近代政治家の名前や、「教育熱心」との言葉もあったのでやれやれ。

「ユダヤ」については、宗教や民族、文化など多岐にわたるためもあり、初めから多くは期待していないが、それでも昨年までの発表に比べて劣っている。得た知識も少ないし、発表において、調べた内容が理解できていない、すなわち意味を知らない言葉を（当然ながら）自信なさそうに口に出す。各発表について質問時間を設けたところ、ユダヤについてはチエちゃんが「どうして迫害され続けているんですか？」と核心をつく質問。それについて古代の話やイエスを殺したのがユダヤ人との俗説を理由として説明するので、私はこう突っ込む。「でもイエスもユダヤ人ですよ。もっとも実父はローマ兵士という説もありますけど」。

それでもユダヤの「選民」意識については発表で言及されたので、私としては、それこそが「エリート」意識なのだとこのゼミとのつながりが説明できた。また米大統領選挙活動において、候補者たちの宗教や民族に触れ、相変わらずWASP男性が強いとはいえ、今回は女性が有力候補となり、サンダースやブルームバーグのようにユダヤ教徒のユダヤ人の名前が挙がり、また共和党ではルビオのようなカトリックのヒスパニックのような候補が出たことでアメリカの変化についても考えた。

最後に、これは毎年、学生にアドバイスするのだが、一般論としてユダヤ人は日本人を好むこと、従ってユダヤ系に多い職業を理解しておくこと、英語でJewは差別語になるのでユダヤ人自身が使う場合は構わないが、我々非ユダヤ人は形容詞

Jewishを使うことなどを説明した。

すでにユダヤ人は歴史的に土地にしがみつくとなく、身につけられる知識を重んじる（すなわち教育熱心）と発表担当者が説明してくれていたし、従って資産としては不動産より金融資産を重視するとの話もあった。そこで、学生たちにユダヤの職業を尋ねてみた。「金融業、ジャーナリスト、学者」の返答は早かったが、その後が続かない。

「さっき、発表者から活躍しているユダヤ人の例としてスピルバーグの名前がでましたよね、そうしたら？」とヒントを出してもなかなか発言がない。「スピルバーグの職業は？」やっと、一人の学生がおずおずと「芸能？」と私の顔を伺うように尋ねる。「そう、芸能の中でも？ スピルバーグは何をしている人？」と再度質問すると、ようやく「映画？」

ああ、知識を教えず、考え方を教えるというのは本当に疲れる。ハリウッドはユダヤ人が作った映画村だし、アメリカの芸能界では、それこそWASPに差別されたユダヤ、イタリア、黒人、ヒスパニックが活躍している。もちろん音楽家にも多い。「特にユダヤ系が多く演奏する楽器は？」ヒントは迫害されたときに持って逃げやすいことだ。それでようやく「バイオリン」の答えを得た。ロシアのユダヤ家族を描いたミュージカル『屋根の上のバイオリン弾き』のタイトルを出したが、ああそうかと頷いたのはチエちゃんだけだった。

さらに前週に被差別者が社会的地位を得るために目指す3職業を思い出させ、「医者」と「弁護士」の答えを引き出した。医者の中なかでも特に「精神科医」は元祖フロイト以降、ユダヤの職業とみなされている。教育熱心な親に育てられた子供が、精神的に追いつめられる事象が多いので、このような医療が必要になったとの説明を学生は熱心に聞いていた。

そう、何事にも理由があるのだ。私がいつもそう言っているのだが、これまでそのような教育を受けてこなかったのだから、原因を考える、調べるという習慣が彼らにはない。私自ら、これを示すしかあるまい。

金融については、現在は数字だけが動いて、キャッシュを持ち運ぶという必要がない。だが昔は違った。けれども出国すれば、その国の通貨が他で使える保証はないし、国が潰れればその値打ちも失われる。そんな事態に有効な財産保全の方法は？学生からはすぐに「金」との答え。そう、だからユダヤ系の姓にはgoldがつくことが多い。

だが、金は重い。もっと小さくて価値があって持って逃げやすいものは？と尋ねると「宝石？」との答え。その中でもダイヤモンドはユダヤシンジケートによって、品質管理と安定価格操作が行われている。従って、国際的にダイヤモンドの値段は変動も少なく地域差もあまりない。欧米の宝石商はユダヤ系だ。

いっぽうダイヤモンドに比べて、値段が100倍以上に跳ね上がる可能性のある投機的なものがある。何？「絵画？」そう、欧米の美術商はユダヤ系なのである。まあ、このくらい知っていれば、とりあえずいいか。「あなた達が近い将来、親しくなる白

人はほとんどがユダヤ系と思われるので、そのつもりで。WASPたちにとっては、我々日本人も有色人種として差別される対象になることを覚悟しておくべきです。」

第8回めの最初は、日本語版『ニューズウィーク』2015年3月15日号の28-29頁、「カオス過ぎる選挙戦を戦う面々」とのタイトルで、当時の米国大統領候補者6名（トランプ、クルーズ、ルビオ、ヒラリー・クリントン、サンダース、ブルームバーグ）の経歴と紹介文が一覧表となっている記事と、雑誌『Pen』2015年の宗教特集から28-29頁のユダヤ教説明文とのコピーを全員に配り、前週の補足とした。

《コミュニケーション能力が大事！》

そのようなことを説明した後、本日のテーマ「好ましい授業、好ましくない授業」について、発表させた。司会はチェちゃん以外の挙手がなく、彼女に任せた。また、単に発表するだけではなく、誰の発表が最も良かったか、各人が選び、その理由を述べさせることにした。

昨年までとは異なり、好ましい授業を受ける機会が多かったようで、好ましくない授業についてはピンマイクの位置が下過ぎて教員の声を拾わないので聞こえないとか、パワーポイントの映像が流されるので、ノートがとれないといった本学の授業についてのコメントが目立った。心当たりのある方は、今後、ご注意ください。

学生たちが選んだ優秀な発表者は、小学校での図工の時間について語った現代システム男子学生と、アメリカで受けた授業について紹介したチェちゃんの2人だった。

学生にこのようなことを考えさせるのは、授業には情報収集能力、考察力、コミュニケーション能力、組織運営能力などが必要であり、身近な存在でそれらが機能しているか否かをチェックするのに良い機会と思われるからだ。

この2週間後だが、やはり本学の語学教員の授業について興味深い報告があったので紹介しておきたい。ゼミの複数の学生が、この教員の授業を履修しているのだが、廊下で会って彼らが挨拶をしても、まったく無視されるとか。おそらくこの教員に悪気はないのだろうが、学生に「変」と受け取られる行動には反省の必要がある。しかも教えている科目が**語というコミュニケーションツールなのだ。まあ講義内容が、古代ギリシャ語や中世英語ならば、どうせそんな言葉での会話は現代において成立し難いのだからいいとして、現代の**語を教える目的を理解していれば、自らも実践する態度を示して当然であろう。

第9回目は、TA2名にパワーポイントの有効な使い方を教えてもらい、また先輩として学生からの相談に対処してもらった。翌日の報告によれば、私には言えないような質問があったということで、その内容をTAに問いただしはしなかったが、適切なガス抜きができたのではないかと考える。

第10回めは、拙著『いい加減な人ほど英語ができる』を読んで、もっとも印象に残ったことについてコメントさせた。この授業の目的は、なんとかして全員に「本」を読んでもらうことである。そして、相手を知るため著作（があればそれ）を読むという

予習の大切さを知って欲しいのだ。

学生たちは、コミュニケーションには語学以外の要素も必要であることや、英会話はまず簡単な言葉をつなげばよいことを認識し、私の英語の授業に関心を示した。私の英語クラスを履修している友達から『クマのプーさん』を教科書に使う面白さを聞き、羨ましがっている者もいた。最近の学生たちは、チャットなどでも授業の楽しさを発信しているのだとか。FDを考えると、このチャットも大いに参考になるかもしれない。

しかしながら反面、スマホによって、対面コミュニケーション能力が低下しているようだ。学生ばかりではなく大人、あるいは一部の教員についても言えそうだが、メールでは連絡できるのに、直接会ってしゃべるのが苦手という輩がいるのだ。もしかしたら最近の晩婚化や非婚化の原因、つまり出会いがないのは、このような状況のためではあるまいか。

さて、スマホを持たない我がチエちゃんは、街で話しかけられることが多く、それが時には外国語なのだそう。またパソコンで外人としゃべる無料サービスを用いて、英会話の練習をしているとか。さらに文科省の「飛び立て留学プロジェクト」にも積極的に取り組むらしく、頼もしい、コミュニケーション能力に秀でた学生である。

《現代社会を考える》

3週間前の授業の終わりに、各人の発表に使用するよう日本語版『ニューズウィーク』のバックナンバーを渡した。それぞれが関心を持った記事をひとつ選び、さらにそれについて調べ、考察して発表するという宿題のためだ。多めに雑誌を持参して机にならば、それぞれ早い者勝ちで好きな号を取る。もし手にした雑誌に興味深い話題がなければ、図書館には全号揃っているのだから、そこで探せばいいとした。

第11回め、第12回めの授業は、その成果の発表にあてた。誰の発表が良かったかを各授業の終わりに無記名投票させることにより、テーマの選び方（聞き手にとっても興味深いテーマかどうか）や、発表の仕方（話し方、内容の充実度など）について反省させることとした。

まずは2016年1月19日号から火星移住の記事についてである。2040年までに移住が始まる、1人あたりの費用が50万ドル、移住は片道切符で地球には戻れない、火星ではビニールハウスなどで野菜が栽培できる、文明形成には100万人が移らねばならない、日本人女性もこのアメリカの宇宙開発企業プロジェクトに加わっている、人間の寿命を宇宙に合わせるためには人工冬眠技術が必要、などSFもどきの話が矢継ぎ早に出て、なかなか皆の関心を集めたようだ。

火星移住の理由としては、地球がテロ、気候変動、人口爆発などで危険なので、そこから富裕層が逃げ出すとのことだ。だが、「それでも何もない火星よりは、地球のほうが暮らしやすいのでは？ 第一、富裕層が、自分で野菜の栽培をしたいと思う？」との、ごく当たり前の単純な質問には適切な答えが用意されていなかった。

では、このプロジェクトの本当の目的は？「どこから資金がでていいのか知りませんが、やはり軍事目的では？」と私。「あらゆるものは、軍事目的によって開発、改良されます。たとえば中国の刺繍は、昔、雨に強い地図を指揮官に持たせるための手段でした。紙だと濡れれば破れるので、布のほうが適当でしょう。また、パラシュートバッグの素材も、もともとは米軍のパラシュートのために作られました。(ちなみに私が40年近く前に米国で買った丈夫なバッグは、今でも劣化せず、まったく傷んでいない。) 火星も含めて、宇宙開発により、国力の誇示はもとより、なにか軍事利用に転用される可能性があるのでは？」

次の学生は、2015年12月15日号から、気候変動により、水面上昇、水没地域、感染症の増加、そして北極の氷が溶けるのでロシアが軍備拡張という話題で、この日は、最も良かった発表に選ばれたものだった。

ただし、この学生の考え方は極右勢力も顔負けの過激かつ短絡的で、だから各国が協力して「ロシアを滅ぼせ」という結論を出したのだ。また、この学生によれば、世界のリーダーには米、英、独、仏、中の5カ国がふさわしいと、日本を入れないのも(この学生の気持ちも理解できるが)寂しい。

「寂しい」などというのは感情で、ちっとも理論的ではないので、私としてはその旨、その場では発言しなかったが、「ロシアにはロシアの立場がある。相手の立場で考えることも大事」と釘をさした。いったいこの学生は世界史を学んできたのだろうか？ ナポレオンもヒトラーも、結局あの大地を攻撃して失敗したのだ。また地球儀あるいは北極を中心にした世界地図を見ればわかるが、ロシアと米国・カナダ、北欧の近いことがわかる。氷が溶けてチャンスと恐怖がもたらされるのはこれらの地域すべてだ。ロシアにしても、温暖化によりツンドラが大農地に変わるかもしれないが、複数の対立国と海をはさんで面と向かう大きな脅威にさらされるのだ。いっぽう陸の国境警備も重要で、この感覚は島国の日本にはなかなか実感できまい。世界情勢について、日本は西側から情報を得ている、つまり常に西よりのニュースに親しんでいることを自覚するべきだ。それはさておき、地球温暖化でロシアが得をする可能性という視点は興味深かった。

さて次の2名はこのような重たい話題ではなく、10名限定のフェイスブック(2016年2月23日号)と、新しいバレンタインデーの過ごし方(2016年2月16日号)についてで、それぞれのテーマで親しい者における信頼関係について考えることとなった。フェイスブックであまり知らない相手にも情報を流すよりも、本当に親しい10名と交流したほうがよいという話、そしてバレンタインデーには、マンネリ結婚生活を送る夫婦がかつてのドキドキ感を味わうためにどうすればいいか、スリルを味わうためにカジノで一緒に遊ぶことを提案しているらしい。

後者を取り上げた学生は、むしろ夫婦でツイスターゲームをしたほうが、自然なスキンシップがあっていいと発言。まだマンネリ夫婦の年齢には程遠いし、だいいち結婚もしていない学生には想像するのも容易ではあるまい。そのわりには、議論が展開

された。私も「現代日本は大人の男女がオシャレに遊べる場所がない。私が若い頃は、サパークラブやホテルのスカイラウンジで、カクテルを飲み、フロアで軽く踊ることもできたけれど、今、それができるのは神戸のポートピアホテルくらい。ツイスターゲームよりは、夫婦で社交ダンスのほうがロマンチックでいいと思いますけど。競技ダンスのように踊るのでなくて、ホールドしてゆっくり動くだけでもいいので」と実体験を踏まえて提案。「確かにツイスターゲームより社交ダンスのほうがいい」と、一同納得したようだった。

このゼミでは、知識は教えるな、勉強の仕方を教えろとの無理難題が教師に課されているのだが、「考え方を教える」のは許されよう。学生の発言では物足りないので、こちらが常識レベルの、あるいは常識から少々逸脱するが持論を出すことで、「なるほど、そのような視点もあるのか」と認識させることも必要なのではないか。

というのも、このゼミが半年なので、とてもじゃないが、学生が自分で気付くのを待つ時間的余裕がないのだ。学生を集めて、調べて考察したことの発表会だけでは、サークル活動の域を出まい。教師の存在意義は、彼らが調べられなかったこと、考えられなかったことを指摘し、知的刺激を与えることと思われてならない。そのためには、もちろん「知識」も用いる。その押し付けではなく、「知識」の使い方を教えるのだ。

さて、第12回めは、前回の続きだが、最初に私は北極海を中央にロシア、北欧、カナダ、アラスカが取り囲む様子を表した地図をコピーして、全員に配った。前回、地球温暖化でロシアが北極海に向けて軍事増強するとの発表があったので、そのようなときにはこんな地図を示すと、各国の事情がより理解できる旨、強調した。日本を真ん中に据えた世界地図では、わからないことが多い。グローバル化というなら、「日の本中華思想」は、そろそろ改めるべきだ。

さて最初は、「テロに屈することなく、パリの人々はカフェで楽しんでいる」とのこと。日常を変えないことで、テロと闘うという姿勢を示しているのだそうだ。

私に言わせれば、大戦中はドイツに占領され、戦後も、五月革命などをパリは経験。またフランスは旧植民地などへ出兵もし、決して日本のようには長い平和を享受していた国ではない。国歌も極めて好戦的だ。つまり、少々のことでは動じない。また個人主義が尊重される大人の国なので、日本のようには他者の目を気にして「自粛」が流行りはしない。ただ、残念な事実、近年、伝統的なカフェが減ってきたことだ。私が初めて渡仏した1974年には、クロワッサンとカフェオーレの朝食をカフェでとるフランス人が多かったが、その需要も少なくなりつつある。

次は、昆虫の形のロボットが開発されているという話で、さすがに理系の学生たちだけあって、興味を示した。やはりゴキブリやハエなど、人間にとっては本来迷惑な存在の昆虫も、環境により適用して進化しており、その能力からは学べることが多いらしい。

いっぽうチエちゃんは、やはり近い将来に出産や育児を抱える可能性のある女性ら

しく、在宅勤務についての報告と考察を紹介した。この日の発表では、もっともよく用意されていたのだが、やはり男子学生には関心が薄いようであった。それぞれ「イクメン」にならざるを得なくなるかもしれないのに、やはり日本人男性は若くても保守的である。

在宅勤務の最大の問題は「孤独感」なのだそうだが、少子化で一人っ子が増えることで解消されるのでは？と、一人っ子のチエちゃんに、やはり一人っ子の私が尋ねた。チエちゃんも私も、そしてこれまで出会った一人っ子全員に共通するのは、「孤独に強い」ということだ。「強い」どころか、孤独を愛するきらいがある。

それより私が考える問題は、外出しないことによる社会の経済損失だ。交通費はもとより、衣服代、外食代などが激減する。もちろん、それで家計に余裕ができると、より大きく快適な家に住むようになるかもしれない。通勤が不要なら、不動産価格の安い、大都会から離れた地域で、それこそ足を伸ばして入れる浴槽付きの風呂場も夢ではあるまい。景気にどのような作用があるかは想像の域を出ないが、明らかに消費行動が変化するだろう。また、在宅は私のような身障者には好都合ではあるが、もちろん職種は限られよう。さらに、入社し9時から5時までいれば働いているように思われるが、在宅の場合は明らかな結果が求められるはずだ。

原則として「フレキシブル」を認めている企業や職域もあるが、他者との同一行動が安心感につながる日本人においては、あまり実際的とも思えない。経営者と幹部自身の意識が変わらなくては無理だろう。バブルの頃、人手不足の解決法として、優秀な若い母親を雇用して効果を上げているという話を、東海地方のある経営者から新幹線車内で聞く機会があった。なんと勤務（というか営業時間）が午前10時から午後3時までで、昼休みをとらずに集中的に働いて1日分をこなすのだそうだ。

初めは呆れていた取引先も、仕方なくこの営業時間に合わせてくれるようになったとか。従業員も、朝、子供を学校に送り出し、午後は子供より先に帰宅できる。もちろん、家事と育児が女性に押し付けられているという問題の解決にはならないが、現実として、これは多くの既婚女性にとって理想的な勤務方法かもしれない。

40年近く前、私がTAとして米人B助教授のもと、毎週150人分の英語レポート採点を行っていたとき、TA予算通りの2時間で求められている仕事を終えたが、私の後任者はその数倍の時間を費やし、事務局を慌てさせた。つまり、従業員によっては、9時から5時までかかる仕事を、10時から15時でさっさと済ますことも有り得るのだ。日本人が働く時間の効率化を本気で考えたら、もっと余暇を楽しめるだろうに。

この日、もっとも皆の関心を集めたのは、「オリンピックはもはやお荷物なのか？」というテーマで、この世界的イベントが開催都市の経済破綻を招く構造についての説明であった。ともかく東京五輪にしても、黒い霧に包まれた部分が多すぎる。アスリートのための大会というよりは、利権大祭りだ。

時期的に、Brexitについて語った学生もいたが、誰一人この造語の意味を知らなかったのは驚きだった。若者がin、高齢者がoutの傾向にあるとの説明があったが、

そればかりではなく、「若者、高学歴、大都市」という集合体と「高齢者、低学歴、田舎（という言葉が悪ければ非大都市）」という集合体との対立で、これに似た構図は、先進国のあちこちで見られるのではあるまいか。日本においてもそうだ。前者は時代の変化を知り、改革の重要性を理論的に語れるが、後者はしかるべき情報に疎く、保守的で感情が思考を支配する。残念ながら、人口としては、後者のほうが多いのが日本の現状である。ただし、「学歴」ではなく「学力」というべきで、「大学」という言葉のついた文科省が一応認めた教育機関を修了していても、まともな読解力や理解力が備わっていない者に「高学歴」のレッテルを貼るべきではあるまい。

最後の学生は、最新の癌治療方法で、外科、放射線、抗癌剤以外に、免疫ハッキングという手段が可能かも知れないとの発表をした。私個人としては興味深かったが、「この治療が確立されると人口が爆発するのでどうかと思う」と発表者が付け足したのには驚いた。まさか看護学類の学生の口から「癌が治ると人が死なないので困る」という意味にとれる短絡的な発言があるとは思わなかったのだ。人口爆発には、計画出産などで対応するべきで、治るかもしれない病気で死なせることが好ましいなら、ユニセフなど、まったく要らぬお世話どころか、害悪を垂れ流していることになる。（もっともこの機関が本当に機能しているなら、だが。）

ともかく『ニューズウィーク』を用いたことで、日頃は知る、あるいは考える機会のなかった事柄に触れられたと思われる。（一人は発表しなかったが、連続3週間無断欠席で何の連絡も寄こさなかったので、当然ながら私も発表テーマについてわざわざ知らせなかった。エリートを目指す者に対し、幼稚園児じゃあるまいし、そこまで世話を焼く必要はない。）この視点を踏まえて、第13回めは、「日本の問題」について、各自考えてくることにした。

《日本の問題》

司会を学生に任せると時間内に全員の発表が終わりそうになかったので、私が仕切ることにした。教師のやり方を示すことで学んでくれる者もいると信じる。この日、積極的に発表したのは僅かに1名で、音楽に興味があるらしく、「日本音楽界2016年問題」を取り上げた。東京オリンピックの準備で会場となる体育館が改築中で、コンサート場所が不足している話だ。「でも、そもそもスポーツのための施設で音響はどうなの？」と私が質問を投げかけると、「音楽を聴きに行くというよりは、皆で騒ぐだけ」ということに、このようなコンサートに出かける学生たちも初めて気がついたようだった。

いっぽう看護の学生が取り上げたのは「生活保護世帯数増」の問題。貧困者が多いだけではなく、そこにつけ込んだ診療報酬水増しなどの「ビジネス」や、生活保護受給者のパチンコ禁止条例などにも触れた。チエちゃんは、女性の貧困問題について考えてきたが、あまりにも問題が大きすぎてまとめられず、この日は不調。だが、他の学生の発表には積極的に質問やコメントを浴びせていた。

その他には人口減少問題、領土問題、若者の低い投票率、メタンハイドレート（資源）問題、教育問題、若者の起業家減少問題などがあったが、ついこのあいだまで受験勉強しか頭になく社会経験もない学生たちには大きすぎるテーマだったようだ。ただし「起業」については、府大にも起業を支援するプログラムがあり、チエちゃんはすでにその説明を聞きにいったとのこと。つまり目的と強い希望があれば、必要な情報を効率よく得て、道が開けるかもしれないとの前向きな雰囲気での回は終わった。

さらに私が「人口問題」、「女性の貧困（出産・子育てで離職）」、「（英語）教育」のすべてを一つの改革で解決する方法があると提言。

昨年、香港滞在中に台湾出身の親友から聞いたのだが、「香港の女性はアジアで一番ラッキー、なぜなら住み込みのフィリピン人家政婦に子供と家庭を任せて外で働けるから」とか。もちろん家政婦は広東語が喋れないので、家庭内では英語での指図となり、子供も幼児期から英語に抵抗がなくなる。

出稼ぎ労働者でも、ちゃんと税金は香港に払うし、多少の消費活動はする。なにより、香港人女性が外で稼ぐので、その分、消費に回る。しかもこの家政婦の人件費は、幼稚園に払う金額よりも安いとか。最近ではフィリピン人の半額で雇えるインドネシア人家政婦もいるらしい。後者は英語が話せないというマイナス要因があるためだ。しかし最近の米国では、ほとんど英語の話せないヒスパニックの家政婦も少なくないが、日常的に必要な単語は遅かれ早かれ学ぶはずだ。（前期の授業終了後に、スイスのレマン湖畔に一週間ほど滞在したのだが、サウジアラビアからの裕福な大家族がフィリピン人のナニー、つまり子供の世話係を複数連れているのを目にした。そのうちのひとりと短いおしゃべりをする機会があったのだが、日本ではなぜ雇ってくれないのかと悲しそうだった。フィリピンでは大卒でも仕事がなく、このような出稼ぎで家計を支えねばならないとか。まだそのような必要がないので、日本人は英語が学べないのだろう。逆に言えば、英語なんぞしゃべれたって、ナニーレベルの仕事にしか従事できないのが国際社会なのだ。）

このような提言に、多くの日本人が反発するのはわかっている。「そんなわけのわからない人間を家に入れて、子供の世話をさせて、事故が起きたらどうするのだ？」だろう。はい、それなら、親が子供の面倒を見ていれば絶対に事故は起きないのか？ヒステリックになって虐待することもないのか？

香港やシンガポールでは、信用できる仲介業者が斡旋してくれる仕組みができて長い。トラブルは、この業者に言えば（解決できることは）解決してくれる。そのようなシステムが出来上がっているので、雇用者も不安を抱いていない。だいいち、そんなに心配なら、雇わなければいいだけのことだ。（そもそも、毎日、交通人身事故が起きているのに、誰一人、自動車を自分の生活範囲から排除しようとししていないか。）

さらに、私の母が育った時代（昭和の初め）までのブルジョワ家庭では、子供の世

話などしなかった実母も少なくない。ちゃんと乳母などが雇われていたのだ。現エリザベス女王も、即位前、ロンドンの乳母に幼い長男チャールズを任せ、自分は夫の赴任先のマルタで暮らしたが、誰もこれを非難しなかった。「実母よりプロのほうが安心」というのが上流家庭の方針だったのだ。

残念ながら日本の政治家は、憲法改正には熱心だが、日々の生活や家庭教育に関わることについては、改革してくれそうにない。まあ、ほとんどの政治家は英語がしゃべれず、(おそらく読むこともせず) グローバルに情報交換などできないのが現実なのだ。そして優秀な官僚も、前例にないことは回避しようとする。フィリピン人家政婦の受け入れのための法改正の可能性は、年末ジャンボ宝くじ一等賞が当たるよりも低そうだ。

さてこの回は、それぞれが「日本の問題」をひとつ取り上げて調べ、考えてくることと言いつ渡したのに、幾つも取り上げただけで何も調べず考えて来ない学生がひとりいた。この学生はすでに4回の無断欠席をしており、このゼミのやり方に合わないようだ。他にも、前週に休んだので、この課題を知らなかったと平気で言い訳をする学生がひとりいる。

いったい今年の学生はどうなっているのだろうか。ゆとり世代のゼミでは、受講生同士がすぐに仲良くなり、私抜きでのコンパも実施したほどだ。従ってお互い連絡を取り合って、休んでもちゃんと課題の情報を掴んでいた。あるいは私の大学のメールアドレスは外部にも公開されているので、直接、質問してくる学生もいた。だが、今年のゼミ生たちは、まったく親しくなっていない。チエちゃん以外はスマホを持っているのだが、実生活では活用しないのだ。

そもそも無断欠席をして自分で翌週の課題情報を得られないような学生は、エリートを目指す姿勢に欠ける。そのような学生を叱るエネルギーも時間ももたないなので、私は「一回休むと翌週も実際的に授業に参加できなくなります」としか言わない。課題を知らずに出席したときの恥ずかしさを感じたなら、ちょっとはどうするべきかを考えるかもしれない。あるいは私に叱責されなくてラッキー、休んでも大丈夫と思うなら、それでもいい。そんな気持ちで人生を歩むと、30年後には「格差」を実感することになるだろう。自覚のない人間には、何を言っても無駄なのだ。

しかし、私が思うに、SNSを使っているても本当の意味で人と繋がっていない現実こそが、日本の問題ではあるまいか。今回、人口問題に絡んで、非婚や恋愛無経験の原因としてコミュニケーション能力の欠如が考えられたが、まさにこれこそが多くの社会問題の根底にあるように思われてならない。

《英語力・日本語力》

第14回めは、英語での発表。テーマは誰でもが話しやすくまた聞き取りも容易と思われるwhat I likeあるいはwhat I like to doとした。おそらくは調査・分析・考察といった彼らにとっての不得意な作業が求められなかったためか、母語でないにもかか

ならず、これまでで最も素晴らしいスピーチを披露してくれた。昨年までのゼミの学生と比べても、はるかにレベルの高いのが驚きだった。この日までの学生と同じとは思えない。皆、よく準備し、堂々と生き活きとして発表するのだ。

ユーモアと自然な手振りを加えて話す者、内容を3項目にまとめる者、家族の愛についてのエピソード、将来の夢について語る者もいたし、好きな映画やアイスクリームといった極めて日常的な話題で皆の関心を集めて雑談に発展させた者もいた。

彼らの英語力を予想していたわけではないが、私は昨年までとは異なるシステムを導入することにしたのも成功した。それはスピーカーの左横、つまり次に発表する予定の者が、そのスピーチをよく聞いて（英語で）質問をするというものである。というのは、概して次に当たる者は、緊張のあまり直前のスピーチが耳に入らず、自分の原稿を黙読する傾向がありそうなので、これを止めさせようと質問を課したのだ。そのために、スピーチの内容を理解する必要がある。円形に座ってお互いの様子が見えるので、そのような熱心な態度が他の学生にプラス効果を与えるのだ。（その反対に、白けた学生がいると、全体の雰囲気マイナスの影響を与える。）

この日、とりわけ、4月からの授業であまり目立たなかった二人のスピーチは素晴らしく、おそらく海外で英語教育を受けたものと感じ、その旨を尋ねると、やはりそうだった。（いつものようにやる気満々のチエちゃんは、バーチャル・リアリティという複雑なテーマを取り上げたために、主張をまとめきれないという印象を与えた。だが彼女のチャレンジ精神は立派である。）

二人の海外生活経験者はもちろんのこと、他の学生にとっても、ひょっとしたらこれまでの日本語の発表の代わりに英語スピーチを複数回させたほうが楽しんでもらえたかと思われた。だが、いっぽう、苦手そうな日本語プレゼンテーションには、不得意だからこそ、何度も挑戦して学んでもらう必要があるだろう。将来、海外でのみ暮らすならともかく、日本で働くかぎり、日本語を使いこなさねばなるまい。

それに本来、英語のスピーチは英語科目で行えばいいのだ。スピーチとまではゆかずとも、英語を話す機会を与えるのは英語科目の使命のひとつであろう。ゼミ終了後、チエちゃんいわく「英語の授業は英文和訳ばかりで、話すことがない」とつまらなそうだった。まあ、教え方も内容も人それぞれなのが大学教育の特徴なのだが。

しかしながら、今回のゼミで私自身、改めて実感したのは、角度を変えてみれば、学生の違った面、彼らの意外な才能が顕れるということだ。すなわち、こちらもさまざまな「定規」で、計測方法を変えることによって、相手の能力を見つけ、評価する必要があるのだ。長年、教えていた英語科目においては、そんなことはとっくにわかっていたのだが、まだ5年めのゼミでも事態は同じだったのだ。ただし、英語の授業やゼミを無断欠席するような学生には、どんな才能があろうとも、それを活用するチャンスを掴み損ねるだろう。要領も実力のうちである。

《彼らがゼミで学んだこと》

第15回めは、ゼミのまとめという意味合いを持たせて、筆記テストを実施した。持ち込みはテキストに指定した拙著必携以外は自由。ただし音の出ないものに限る。問題はこの2週間前に発表した「このゼミで自分が学んだことについて」と、この日に課題を与えた小論文である。両方とも、昨年度と同じ設問だ。

前者では内容と文章について推敲する時間を与えたのに対し、後者はレポートの書き方を学びながら実際に作文できるよう、全員に次の文章から始めさせた——「私が堀江珠喜著『いい加減な人ほど英語ができる』を読み、最も興味を抱いたのは次の3ヵ所においてであり、それらについて自分自身の体験に触れながら論じることにする。」

本のタイトルには二重括弧を用い、引用には頁数を明記することなどを教え、冒頭文を統一したのは、この続きに同様の文体を求める狙いがあったからだ。内容もさりながら、形式を実践で学ばせるという目論見は成功したと思われる。

また第一問において、彼らがこのゼミで学んだと感じているのは、おおまかに次の3点、① 徹底的な調査の重要性 ② 幅広い知識をもとにし、whyとhowをも検討する考察の必要性 ③ 相手を意識した発言（プレゼンテーション）の要領、であった。

私としては、まだまだ彼らがこれらを習得していないと思うが、このような事柄に目が向くようになっただけでも、半年間のゼミの成果を肯定したいのである。

《要約》

阿弥陀籤による決定がきっかけで、4年前に担当を始めた初年次ゼミナールも、5年めとなる。総合科学部時代に大学院教員として修士の授業や博士論文指導をしていたときの鬱陶しさに比べれば、はるかに明るく、創造的で楽しい。なにしろ直前まで入試目的の勉強一辺倒だった学生たちに、知的ショックを与え、発想を転換させ、学問の自由を実感させるのだ。

「エリートを目指す」は、とにかく意欲ある学生を集めるためのワードだが、そのなかでも、積極的な者に発言させるなど、「競争原理」を重視している。もし本当に1%の人間が99%の富を所有するなら、その少数派に属することを目指してなぜ悪い？ より良い人生を送るため、国外へ出ることも躊躇しないグローバルな価値観を身につけてもらいたい。

そんなゼミ報告を毎年行うことにより、社会の変化と府大生の特徴を考えるための資料を作成したいのである。